300-138
1200501367127
300
138

汲古法帖

三

（元度宮碑）

始

九成宮醴泉銘

放大古法帖

第三卷

（第三回配本）

中央書道協會

300
138

凡例

一、本書は歐陽詢の書中最も圓熟したものだとの稱ある九成宮碑を寫眞で放大して替ひよくしたものであります。

一、九成宮碑は種々なるものがありますが本書は七種のものからその勝つたものゝみを採つて一冊としそれを放大したものであります

一、權威ある帖にも淳山磨滅した文字がありますが、それは色々なものから採つて補つて置きました。その中には後人の補筆で如何はしいと思ふものも二三はありますけれど、磨滅して形の判明せぬものよりは、初學者に取つては寧ろこの方が良いと思つて載せました。しかしこれは場合によると、歐法の筆法を誤る事もありますから、此の如き文字は附錄の原本と對照して研究あらんことを切望いたします。

一、卷末に書法上よりの分類と扁、旁、冠、脚、垂、繞、構、の分類を掲げました初學者を幾分にても裨益すれば幸甚です。

九成宮醴泉銘

祕書監撿校侍

中鉅鹿郡公臣

魏徵奉勑撰

維貞觀六年

孟夏之月

皇帝避暑乎
九成之宮此
則隨之仁壽
宮也冠山抗

殿絶壑為池

跸水架楹分

巖蹙疎闌高閣

周建長廊四

起棟宇縢葛

臺榭參差仰

視則蓊遝蓰百

尋下臨則崢

巒千仞珠璧

交暎金碧相

暉照灼雲霞

蔽虧日月觀

其移山廻澗

窮躬極泰侈以

人從欲良足

深尤至於炎

景流金無欝

蒸之氣微風

徐動有淒清

之涼信安體

之佳所誠養

神之勝地漢

之甘泉不能

尚也

皇帝爰在弱
冠紆營四方
遠乎立年撫
臨億兆始以

武功壹海内

終以文德懷

遠人東越青

丘南踰丹儆

皆獻璨奉贄

重譯來王西

暨輪臺北拒

玄關並地列

州縣人充編

戸氣淑年和

迹安遠遠肅群

生咸遂靈貺

畢臻雖藉二

儀之功終資

一人之慮

遺身利物櫛

風沐雨百姓
為心憂勞成
如腊甚禹足
疾同堯肌之

之胼胝針石
屢加腠理猶
滯爰居京室
每弊炎暑群

下請建離宮

庶可怡神養

性聖上愛

一夫之力惜

十家之產深
閉固拒未肯
俯從以為隨
氏舊宮營於

曩代蕪葉之則

可惜毀之則

重勞事費国

循何必改作

於是斲彫為
樸損之又損
去其泰甚葺
其頹壞雜丹

堀以沙礫間
粉壁以塗泥
玉砌接於土
階莽莢續於

瓊室仰觀壯
麗可作鑒於
既往廟察畢
儉足垂訓於

後昆此所謂
至人無爲大
聖不作彼竭
其力我享其

功者也然昔
之池沼咸引
谷澗富城之
内本乏水源

求而無之在
乎一物既非
人力所致
聖心懷之不

忘學以四月

甲申稍旬有

六日己亥

上及中宮麻

覽臺觀閑步

西城之陰躊

躇高閣之下

俯察厥土微

覺有潤因而
以杖導之有
泉隨而涌出
乃承以石檻

引為一渠其
清若石鏡味甘
如醴南注丹
霄之右東流

度於雙闕畢
穿青瑣縈帶
紫房激揚清
波滌蕩瑕穢

可以道柔養正

性可可以澂瑩

心神鑒瞑群

形潤生萬物

同湛恩之不

竭將玄澤之

常流匪唯軋

象之精蓋亦

坤靈之寶謹

案禮緯云王

者刑殺當罪

賞賈錫當得功

禮之冝則醴

泉出於闕庭

鶡冠子曰聖

人之德上及

太清下及太
寧中及萬靈
則醴泉出瑞
應圖曰王者

純和飲食不

貢獻則醴泉

出飲之令人

壽東觀漢記

曰光武中元
元年醴泉出
京師飲之者
痼疾皆愈然

則神物之来

寔扶

明聖

既可蘊兹況

㽔又將延彼

遐齡是以百
辟卿士相趨
動色我后固
懷搖撼推而

弗有雖休勿
休不徒聞於
往昔以祥為
懼實取驗於

當今斯乃上
帝玄符天
子令德豈臣
之末學所能

丕顯但職在
記言屬茲書
之盛美有遺
事不可使國

典策敢陳實
錄爰勒斯銘
其詞曰惟
皇撫運奄壹

期萬物斯覩

寰宇千載膺

功高大舜勤

深伯禹絶後

光前咎豈三邁

五握機躡矩

乃聖乃神武

克禍亂文懷

遠人書契未
紀開闢不臣
冠冕並韍琛
贄咸陳大道

無名上德不
德玄功潛運
幾深莫測鑿
井而飲耕田

而食靡謝天

功安知帝力

上天之載無

臭無聲萬類

資始品物流
形隨感變質
應德效靈介
焉如響昔恭恭

明明雜遝景
福葳蕤繁祉
雲氏龍官龜
圖鳳紀日合

五色烏星三
趾頌輟不工
華無停史上
善降祥上智

斯悅流謙潤

下潺湲晈潔

蒓首醴甘冰

凝鏡澈用之

日新挹之無
竭道隨時泰
慶與泉流
我后夕惕雖

休弗休居崇

茅宇樂不般

遊黃屋非貴

天下為憂人

玩其華我取
其實還遂淳反
本代文以質
居高思隆持

滿載溢念茲
在茲永保貞
吉
兼太子率更令

勅海男臣歐陽

詢奉

勅書

書法上及扁、旁、冠、脚、構、続、垂の分類

備考　扁、旁、冠、脚、構、続、垂に於ては各代表的のものは皆擧げ他は省きました。例へば之続に敍いて言へば、羊旁の内結構の疊分異れる代表の四種のみを揭げ、國構について言へば二枠の異れる代表的のもののみを揭げ他の澤山の同枠のものは皆省きました。

解說

筆法の部

(一) 勒法

一二王三
工五十

これは勒法といつて橫畫を研究するためです。起筆、終筆、運筆等に注意するのです

(二) 努法

下中申隼
非弗州

これは努法といつて竪畫の研究です。縱のことを波法または捺法ともいひます。人名金太天史登泰之又道延建越の三字は縱波といひ、之道延建越の五字を橫波といひます。

(三) 礎法

人名金太天史登泰之又道延建越

これは礎法の研究です。礎のことを撇ともいひます。戸居庶身歩今金太天又史登泰之の丸字は撇波といひ、之道延建越の五字を橫波といひます。

(四) 掠法

戸居庶身歩右石月夕及勿形

これは掠法の研究です。掠法のことを撇ともいひます。戸居庶身歩右石の如きを縱撇といつて心地よい程撥ばして書くのです。夕及勿形の如く一字中に掠が二つ以上ある場合は連撇といつて方向及筆意に變化を持たしめて書きます。

(五) 啄法

重年

これは啄法の研究です。これを平啄といつて、短かく、力强く書きます。

(六) 趯法

水事乎子可
灼旬尙同間
力乃爲爲長
良成氏我九
也尤心必風
宮冠

これは趯法といつて勾の研究です。水事の如く中にあるのを中勾といひ、短く力强く書きます。乎子の如く曲りたる形割についてゐるのを轉勾といひ長くします。灼の如きを勾筋といひ、やゝ緩かに中を包むやうに書きます。旬の如きを勾筋といひ、力强く書きます。同間同の如きは右勾といひ右側にある勾です。力乃の如きは許豐の文字について居る勾です。爲爲の如きは屈旬といひ二点を包むやうに書きます。長良の如きを同右勾といひ、右に向ふ時に全く筆を更めて書きます。成氏我九也尤の如きは浮鷺といひ、內面を大きく見ゆる樣に書きます。成氏我の如きを戈勾といひ、中底にて余り曲もぬ樣力の抜けぬやうに書きます。心必の如きを橫勾といひ、起筆に注意し一点をつゝむやうに書きます。氣風の如きを骨指勾といつて目々間に力强くし中途で力の抜けぬやう書くのです。宮冠の如きを平勾といひ、下向の時特に筆を更めて書くのです。

(七) 側法

言立京六
其美盖愛
峰

これは側法といひ点の研究です。言立は上点といひ、京の脚部の左右の点は梅橫杏仁といひ、起筆と收筆に注意を要します。六其の脚部を其脚点といひ、左右受言に注意し上部を安定せしむるやうに書きます美盖の頭部を羊頭点といひ左右の掩き合ひ平均に注意します。愛峰は瓦冠の点、無は烈火点といひ共に各点に變化を持たしむる中に聯絡を失はぬやうに書きます。

(八) 策法

池城持

これは策法の研究です。池の策は撥挑といひ輕快に、城の策に平挑といひやゝ慎重に、持の策は橫挑といひやゝ重く書くのです。

結構法の部

(一) 間架法

皇書臺壽著
田物

これは間架法の研究です。間架法とは文字の点劃と点劃の間隔のことです。皇書壽著は橫劃間の間架法を示し、田は一般的、物は斜劃間の間架法を示したのである。

(二) 向背法 疎排法 俯仰法

我介非
五不丹代

左は俯仰法といひ仰勢、俯勢を示したものです。不丹代我介非は排排及向背法といひ擺のあるものは充分展ばして書き、左右から突き出た劃は互に譲り合はせ相犯さぬやう、易労離れ勝ちにならのやう。氣脈を通じ左右相親しむやうに書きます。

(三) 中心法

壹常崇方
享文安

これは文字の中心を研究するのです。壹常崇は上下の竪劃を中心の標準とし、方享は上点と勾を中心の標準とし、文安は上点と組み合はせ中心の標準とします。
備考、下部はやゝ右側へかたよるをよしとします。

(四) 同姿情別法

出景巻弱兆
品湛炎養冠
樸利棟榊

これは同姿別情法といふ一字中に同體のものが二つ以上ある場合に變化をつけるため、一方を優勢にし一方を劣勢にとる研究です。出景は上下に、巻弱兆は左右に、品湛は三ヶ同體があります。炎養は波法が二つあり、冠榊利棟榊は勾が二つ以上あります。

一二王三工五十

下中申畢非弗州

人令金太天又史

（五）増減假借法

德 流 隨 惰 土
澤 辟

これは増減假借法といひ文字の位置などある爲めに適宜に一劃を減じ或は増すことです。德流隨惰は一劃又は數劃を減じ、土澤辟は一劃又は數劃を増して居ます。これは必ず古人の佳蹟に傚ふもので自分勝手にすることは許されてゐません。

（六）體裁法

己 力 正 樂
貞 四 可 夫
固 而 義 日
亀 下

これは文字の體裁の研究です。己は偏體といひ一方に偏してゐます。力は斜體といひ傾いてゐます。しかし傾いて居る中に自然に方正を保つやうに書くことが肝要です。正は正体といひ上下左右何れにも偏らぬやうに書きます。樂は圓体といひ周圍が圓くなつてゐるやうに書きます。貞は長体といひ長く書き、四は短体といひ短く書きます。可は下寛といひ上を寛かに下を固くし、夫は下寛といひ下を寛かに上を固くします。固は平四角といひ上と下との兩肩を大体平かに齊しく書きます。しかし右肩下がりになつて脚部の垂れるを嫌ひます。而は開兩肩といひ兩肩が開ひて下部が合ふ樣にし右肩下がりに脚の直になるのを嫌ひます。義は大体といひ大きくなる字ですが各々点劃が離れ／＼にならぬやう中心に集める心持ちにて書きます。日は小体といひ小さく書く文字です。これを他の文字と同一体にすると見られません。亀は書傍といひ各点畫をや、細目に安らかに書きます。下を疎畫といひや、太目に引きしめて書きます。

（七）揖讓法

勒 竦 醴 謝 響
甲 聲

これは揖讓法の研究です。勒は讓左といひ左を高く右を低くし右側は退讓の色あるが如くにします。竦は讓右といひ右を高く左を低くし左側は退讓の色あるが如くします。醴は分讓といひ兩人組立つが如く讓り合ひ相親しみて相犯さぬ樣にします。謝は三匀といひ中間を正しく主の如く左右は臣下の禮勢を取つて書くのです。響は讓横といひ横畫を長くし全體の筆勢を横畫に讓るやうに書くのです。甲は讓直といひ縦畫に筆勢を集中して書きます。聲は讓縱といひ三部互に讓り合ひ相犯さぬやうに書きます。

（八）左右安當法

井 鄉 相 明

これは左右の安當法の研究です。井は左垂といひ右邊を長くすることを嫌ひます。鄉は右垂といひ右を長くします。相は下平といひ下を平にします。明の如く左邊小なる時は上平といひ上を平にします。

（九）地歩管領法

雲 禹 則 仰 鄕
萬 爵 華

これは地歩管領法の研究です。雲は上点地歩といひ上畫を簡にし畫清く下面を窄くし瘦く書くのであります。禹は下点地歩といひ下面を寛かに輕く上を窄く重く書くのです。則は左占地歩といひ左邊を大に畫を細目にし右邊を小に畫を太目にするのです。地は右占地歩と反對にします。仰は左右占地歩といひ左右の畫を細く形を長くし中間の畫を太く形を短くするのです。鄕は中占地歩といひ中間を大にし畫を弱く窄くするのです。萬は上下占地歩といひ上下を細目にし中間を窄く畫を太目に書くのです。

（一〇）上下安置法

宮 至 霞 響 今
谷 鑒 文

これは上下安置法の研究です。宮のやうに冠のある字は天覆といひ上の冠を以て下を覆ふやうに書くのです。但し寄安定の如く下部の自然に廣くなる文字は例外です。至の如く下畫に横畫のある文字は地載といつて上部を輕く下部を慎重にし上部を安らかに載せて居るやうに書くのです。霞の如く上下二部よりなる文字を二段といひ、響の如く三部よりなる字を三段といひます。長短分量を加減し平均を失はぬやうに書きます。今の如きを下蓋といひ左右が平均して居るやうに書きます。谷などの文字を蓋下といひ兩邊が平かに伸びて居るのを要す。鑒などの文字を積といひ点畫のこみ合ひに注意して位置を按ずる。文の如きを承上といひ上を受くる文の交はる所が文字の眞中にあるやうに書きます。

扁旁冠脚構繞垂の分類の部

備考　一、この部は前の應用でして書法上の説明の必要はありませんから略します。
　　　二、同じものでも構の違ふものと勢の異なるものは掲げました。

一、扁の附くもの
二、旁の附くもの
三、冠の附くもの
四、脚の附くもの
五、繞の附く文字
六、垂の附く文字
七、構の附く文字

倫儀凝加味域縮如姓引得性悦情於時暎膝勝肌相
楠將物猶揭損深池滿列矩和穢社神瑞竭明礫粉既
紀緯耕取穐臻般踏跨調請眠錫輪隨壁勒醴體齢
則功飾彫沐斯視改致期厰飲毀殿波乱離群辟頷蝎
含京晁冠宮察奄居房莫符昆暑成罪者登營策剝藝
云其克燊勞帝學吉幣夏度尋甚亦案昔書思膺炎臭
壆無泉脊碧當孟秦築臺筆質舜傷養象覺臺鑿霧麗
遠運遊道廻建延廼逕
歴崇尖痾
周囚風鳳氣閑同

登泰之道延建越
戸居庶身步右石
月夕及勿重年形
水事乎子可灼旬
尚同閒力乃為焉
長良成氏我九也

尤心必氣風宮冠
言立京六其美蓋
愛崢嶸無池城持
皇書臺壽暑田物
五不丹代我介非
臺常崇方享文安

出景營弱兆品潺
炎養冠樣利棟榭
德流隨懼土澤辟
己力正樂貞四可
夫固而曩日龜下
勤竦醴謝善甲聲

井廊相明雲禹則
地仰卿萬欝鬱華宮
至霞響今谷靈文

儉儀凝加味城巖
如姓引得性悅惜
於於時暎膝膝肌

相櫛將
物猶揚損
深池滿
列矩和穢
祉神瑞
竭明礫粉

既紀緯
耕耒職臻
般躊跱
訓請貺錫
輪隨隧
勒醴體齡

則功師
彫沐斯視
改致期
欝飲毀殿
波亂離
群辟頽鶡
含京冪
冠宮察奄
居房莫
苻昆暑戎
罪者登
營筞窮靈

云其克塗勞帝學
吉契夏變尋甚恭
案昔書思膺炎臭
聖無泉止肖珀石當孟
泰縈臺葷質赤衍舊
養象覺壹巖金霄麗

遠逮遯迢道廻建迹
起趁匪麻歷靡疾痼
国国風鳳氣閑閑

原本の部

（實物大）

九成宮醴泉銘

秘書監檢校侍中鉅

鹿郡公臣魏徵奉

勅撰

宋本○培（資料大）

維貞觀二年孟夏之
月皇帝避暑乎九
成之宮此則隨之仁
壽宮也冠山抗殿絶
壑爲池跨水架楹分
岌疎闕高閣周建長
廊[illegible]起棟宇[illegible]葛臺
榭參差仰視則迢遰

百尋下臨則崢嶸千仞珠璧交暎金碧相輝照灼雲霞蔚曰月觀其移山迴澗窮

泰極侈人從欲良之深尤至於炎景流金無纖爵蒸之氣微風徐動有淒清之涼信

安體之佳所誠養神
之勝地漢之甘泉不
能尚也
皇帝爰在弱冠經營
四方逮乎立年撫臨
億兆始以武功壹海
內終以文德懷遠人
東越青丘南踰丹徼

皆獻琛奉贄重譯來
王暨輪臺北狄玄
關並地列州縣人免
編戶氣淵平和迹安

遠肅群生咸遂靈貺
畢臻雖藉二儀之功
終資一人之憲遺
身利物櫛風沐雨

為心憂勞成疾同
尭肌之如腊甚禹足
之胼胝針石屢加腠
理猶滯爰居京室每
弊炎暑群下請建離
宮庶可怡神養性
聖上一夫之力惜
十家之產深閉固拒

未肯俯從以爲隨氏
舊宮營於曩代棄之
則可惜毀之則重勞
事貴因循何必改作

於是斲彫爲樸損之
又損去其泰甚菪其
頽壞雜丹墀以沙礫
閒粉壁以塗泥玉砌

接於土階茅茨續於
瓊室仰觀壯麗可作
鑒於既往俯察畢儉
後昆此所是垂訓於

謂至人無為大聖不
作彼竭其力我享其
功者也然昔之池沼
咸引谷澗宮城之內

本之水源求而無之
在一物既非人力
所致聖心懷之不
忘學以四月甲申朔

旬有六日己亥上
及中宮歷覽臺觀閑
步西城之陰躇高
閣之一□□□□□
察厥土徽

覺有潤回而以杖薬
之有泉隨而涌出乃
承以石檻引爲一渠
其清若鏡味甘如醴

南注丹霄之右東
度於雙闕青瑣
縈帶紫房激揚清波
滌蕩瑕穢可以導養

正性可以澂瑩心神
鑿暎群形潤生萬物
同湛恩之不竭將玄
澤常流匪唯軋

之精蓋亦坤靈之寶
謹案禮緯云王者刑
殺當罪賞錫當功得
禮之宜則醴泉出於

闕庭鵾冠子曰聖人
之德上太清下及
太寧下及萬靈則醴
泉出瑞應圖曰王者

純和飲食不賣獻則
醴泉出飲之令人壽
東觀漢記曰光武中
元元年醴泉京師

飲之者痼皆愈然
則神物之來寔扶
明聖既可蠲茲況痼
又將延彼遐齡是以

百辟卿士相趍動色
我后固懷攜提而
弗有雖休勿休不徒
闡於往昔以祥為惟

實永驗於當今斯乃
上帝玄符天子令
德豈臣之末學所能
丕顯但職在記言

茲書事不可使國
盛美有[illegible]典策敢陳
實錄爰勒斯銘其詞

惟皇撫運奄壹宇
宇千載膺期萬物斯
覩功高大舜勤深伯
禹絶後前登三邁
五握機蹈矩乃聖乃
神武克禍亂文懷遠
人[illegible]契未紀開闢不
臣[illegible]冥並龍探賁咸

陳大道無名上德不
德玄功潛運幾深莫
測鑿井而飲耕田而
食靡謝大功安知帝
力上天之載無臭無
聲萬類始品物流
形隨感變質應德效
靈不焉如響恭恭明

明雜邉景福蔡蔡繁
祉雲氏龍官龜圖鳳
紀曰含五色烏呈三
趾頌不輟工華無停

史上善降祥上智斯
悅流謙潤下潺湲胶
潔蓱苹百醴甘冰叢鏡
澈用之曰新挹之無

竭道隨時泰慶典泉
流我后夕惕雖休
休居崇茅宇樂不
般遊黃屋非貴天下

為憂人玩其華我取
其實遵淳及本代文
以質居高思墜持滿
戒益念茲在茲永保

九成宮醴泉銘解說

この帖は支那の歐陽詢といふ人が書いたものであります。歐陽詢は唐時代「皇紀一、三〇〇年頃」の人で、八體を盡く能くしたとの事でありますが、現在あるものでは楷體が最も名高く楷法の極則とされて居ります。この帖は歐陽詢が最も圓熟した時代に書いたもので、溫健上品で全く理想的なものであります。

この帖には色々の種類がありますが、本書は七種のものを參照して各帖の長所ある文字を拾ひあつめて一帖となし、然る後寫眞で展大したものであります。中には大變後人の補筆した跡が見ゆるいかゞはしい物も二三載せましたが、初學者には剪減して不明瞭なるものよりはこの方がよいと思つて採つたのです。この点御諒察の上御研究あらんことを切望します。（原本を參照して研究して下さい）

九成宮醴泉銘

秘書監檢校侍中鉅鹿郡公臣魏徵奉勅撰

維貞觀六年孟夏之月。皇帝避二暑乎九成之宮一。此則隋之仁壽宮也。冠〻山抗〻殿。絕〻壑爲〻池。誇〻水架〻楹。分〻巖疎〻闕。高閣周建。長廊（四）起。棟宇騰爲。臺榭參差。仰視則還遷百尋。下臨則崢嶸千仞。珠壁交暎。金碧相輝。照二灼雲霞一。蔽二虧日月一。觀〻其移〻山徙〻澗。窮〻泰極〻侈。（以）〻人從〻欲。良足二深尤一。至〻於炎景流〻金。無二爍蒸之氣一。微風徐動。有〻淒清之涼〻。信安體之住所。誠養神之勝地。漢之甘泉。不〻能〻尙也。維貞觀六年孟夏の月、皇帝暑を九成の宮に避く。此れ則ち隋の仁壽宮なり。山に冠して殿を抗げ壑を絕ちて池となし、水に跨りて樓を架し、巖を分ちて闕を疎で、高閣周り建ち長廊（四）に起り、棟宇騰葛臺榭參差、仰ぎ觀れば則ちてうてい百尋、下を臨めば則ち崢嶸千仞珠璧交々暎じ、金碧相輝き、雲霞を照灼し、日月を蔽虧せり。其の山を移し澗を廻し、泰を窮め侈を極め人を（以て）欲を從いまゝにするを觀れば、良に深く、尤むるに足れり。炎景金を流せども爍蒸の氣なく、微風徐ろに動きて淒清の涼あるに至りては、信に安體の住所、誠に養神の勝地にして漢の甘泉も尚ふる能はざるなり。

皇帝弱冠經二營四方一。建二乎立年一。撫二臨億兆一。始以二武功一壹二海內一。終以二文德一懷二遠人一。東越二青丘一。南踰二丹徼一。皆獻〻琛奉〻贄。重〻譯來王。西暨二輪臺一。北拒二玄闕一。並〻地列二州縣一。人充二編戶一。氣淑年和。遐安遠邇。群生咸遂。靈貺畢臻。雖〻藉二二儀之功一。終資二一人之慮一。遠〻身利〻物。（綿）〻風沐〻雨。百（姓）爲〻心。憂勞成〻疾同二堯肌之如一。膏。甚二禹足之胼胝一。針石屢加。藥理彌滯。

皇帝弱冠にして四方を經營し、立年に達びて、億兆を撫臨し、始めは武功を以て海內を壹にし終りは文德を以て遠人を懷く。東は青丘を越え、南は丹徼を踰え琛贄を獻じ、贄を奉じ、譯を重ねて來王せり。西は輪臺に暨び、北は玄闕に拒るまで、地を並べて州縣を列し、人編戶に充てり。氣淑に年和し、遐きは安く、遠きは邇かに、群生咸遂ぐること、靈貺畢く臻り、二儀の功に藉ると雖も終に一人の慮に資る。身を遠れて物を利し、風（に櫛り）雨に沐し、百（姓を）心となし、憂勞して疾を成せること、堯の肌の膏の如きに同じく、禹の足の胼胝より甚し。針石屢々加ふれども、藥理彌滯せり。

爰居二京室一。每弊二炎暑一。群下請。建二離宮一。庶可二怡〻神養一性。聖上愛二一夫之力一。

惜二十家之產一。深閉固拒。未二肯俯從一。以爲、隨氏之舊宮。營二於殷代一。棄之則可レ惜。毀レ之則重レ勞。事貴二因循一。何必改(作)。

爰に京室に居りて、毎に炎暑に蒸る。群下請ふらく、離宮を建てば、直はくは神を怡ばせ性を養ふべしと。衆上一夫の力を愛み、十家の產を惜み、深く閉ち固く拒みて、未だ肯て俯從せず。以爲へらく、隨氏の舊宮、殷代に營めり。之を棄つれば則ち惜むべく、之を毀たば則ち勞を重ぬ。事は因循を貴ぶ。何ぞ必ずしも改め(作らぬと)。

於レ是斲二彫爲一樸。損レ之又損。去二其泰甚一。葺二其頹壞一。雜二丹墀一以二沙礫一。間二粉壁一以二瑜泥一。玉砌接二於土階一。茅茨續二於瓊室一。仰觀二壯麗一。可レ作二瞽(於)既往一。俯察二卑儉一。足レ垂二訓於後昆一。此所レ謂、至人無レ爲、大聖不レ作。彼竭二其力一。我享二其功一者也。

是に於て彫を斲りて樸となし、之を損して又損し、其の泰甚を去り、其の頹壞を葺め、丹墀に雜ふるに砂礫を以てし、粉壁に間ふるに瑜泥を以てし、玉砌は土階に接し、茅茨は瓊室に續く。仰ぎて壯麗を觀れば、瞽を既往になすべく、俯して卑儉を察すれば、訓を後昆に垂るゝに足る。此れ謂はゆる、至人は爲すなく、大聖は作らず、彼は其の力を竭し、我は其の功を享くる者なり。

然昔之池沼咸引二谷澗宮城之內一。本乏二水源一。求而無レ之。在レ□一物。既非二人力所一致。聖心懷レ之不レ忘。粤以二四月甲申朔旬有六日己亥一。上及二中宮一、歷二覽臺觀一。閑二步西城之陰一。躋二蹟高閣之下一。俯二察厥土一。微覺レ有レ潤。因而以レ杖導レ之。有レ泉隨而湧出。乃承以二石檻一。引爲二一渠一。其清若レ鏡。味甘如レ醴。南注二丹霄之右一。東流二度於雙闕一。貫二(穿)青扉一。縈二帶紫房一。激揚清波一。滌二蕩取穢一。可レ以澄二靈一心神一。鑒二映群形一。潤二生萬物一。同二洪恩之不レ渴。將二玄澤之常流一。匪二唯乾棄之形一。蓋亦坤靈之寶。

然るに昔の池沼は、咸谷澗を宮城の內に引けり。本水源に乏し。求むれども而も之なし。□にあるの一物、既に人力の致す所に非ず。聖心之を懷うて忘れず。粤に四月甲申朔旬有六日己亥を以て、上中宮と臺觀を歷覽し、西城の陰を閑步し、高閣の下に躋躇す。厥土を俯察するに微潤あるを覺ゆ。因つて杖を以て之を導くに、泉あり隨つて湧き出づ。乃ち承くるに石檻を以てし、引いて一渠となす。其の清きこと鏡の如く、味の甘きこと醴の如し。南は丹霄の右に注ぎ、東は雙闕に流度し、青扉を貫(穿)し、紫房を縈帶し、清波を激揚し、穢濁を滌蕩す。以て正性を澄靈すべく、以て心神に鑒映すべく、群形を鑒映し、万物を潤生し、洪恩の竭きざるに同じく、玄澤を常流に將ること、唯に乾棄の形のみに匪ず、蓋し亦坤靈の寶なり。

蓬峯。禮緯云。王者刑穀當レ罪。賞錫當レ功。得二禮之宜一。則醴泉出二於闕庭一。鶡冠子曰。聖人之德上及二太清一。下及二太寧一。(中)及二萬靈一。則醴泉出。瑞應圖曰。王者純和。飲食不二(貿)獻一。則醴泉出。飲レ之令二人壽一。東觀漢記曰。光武中元元年。醴泉出二京師一。飲レ之者痼疾皆愈。然則神物之來。寔扶二明聖一。既可レ謂二茲沈痾一。又將レ延二彼遐齡一。

謹んで案ずるに、禮緯に曰く。王者刑殺罪に當り、賞錫功に當り、禮の宜しきを得れば、則ち醴泉闕庭に出づ。鶡冠子に曰く。聖人の德、上は太清に及び、下は太寧に及び、(中)は万靈に及べば、則ち醴泉出づ。瑞應圖に曰く。王者純和、飲食(貿)獻せざるときは、則ち醴泉出づ。之を飲めば、人をして壽ならしむ。東觀漢記に曰く。光武(皇帝)の中元元年に、醴泉京師に出づ。之を飲む者は、痼疾皆癒ゆと。然らば則ち神物の來るは、寔に明聖を扶く。既に茲の沈痾を謂くべく、又將に彼の遐齡を延べむとす。

是以百辟卿士。相趍動レ色。我后固懷二搖抱一。推而弗レ有。驛休勿レ休。不二徒聞一於往昔一。以レ群爲レ懼。實取二驗於當今一。斯乃上帝玄符。天子令德。豈臣之末學所二能丕顯一。但職在二記言一。屬二茲書事一。不レ可レ使二國之盛美有二遺典一。敢陳二實錄一。爰勒二斯銘一。』其詞曰。

是を以て百辟卿士、相趍つて色を動かす。我が后闕より搖抱を懷くも、推して有せず。休すと雖も休する勿きは、徒らに往昔に聞くのみならず。群を以て懼をなすは、實に驗を當今に取る。斯れ乃ち上帝の玄符、天子の令德、豈臣の末學の能く丕顯する所ならむや。但職記言に在り。此の書事に屬して、國の盛美をして遺せる典策あらしむべからず。敢て實錄を陳べ、爰に斯の銘を勒す。』其の詞に曰く、

惟皇運。奄二豈寰宇一。千載膺レ期。萬物斯覩。功高二大舜一。勳深二伯禹一。絕レ後光レ前。登レ三邁レ五。』握レ機踏レ矩。乃聖乃神。武克二鴻亂一。文慎二逸人一。書契未レ紀。刪闡不レ臣。冠冕蓋襲。環瑋咸陳。』大上無レ名。上德不レ德。玄功潛運。幾深莫レ測。鑒。井而飲。耕。田而食。膺レ謝二天功一。安知二帝力一。』上天之載。無レ臭無レ聲。萬物資始。品物流レ形。隨。感變レ質。應德效レ靈。介爲如レ響。赫赫明明。』羅遐景爾。蔽熒室祉。雲氏龍官。鳥國鳳紀。日含二五色一。鳥呈二三趾一。頌不レ絕レ工。筆無レ停レ史。』上善降レ群上智斯悅。流レ識潤レ下。滂沛皎潔。洋洋醴甘。冰凝鏡徹。用レ之日新。挹レ之無レ竭。』道隨レ時泰。慶與レ泉流。我后夕惕。纖レ休弗レ休。居崇二茅宇一。樂不二較遊一。黃屋非レ貴。天下爲レ憂。』人玩二其華一。我取二其實一。還。淳反レ本。代レ文以レ質。居レ高思レ墜。持レ滿戒レ溢。念レ茲在レ茲。永保二貞吉一。』

惟れ皇運を撫し、寰宇を奄登す。千載期に膺り、萬物斯れ覩はる。功は大舜よりも高く、勳は伯禹よりも深し。後を絕ち前に光り。三に登り五に邁る。機を握り矩を踏み、乃ち聖に乃ち神なり。武は鴻亂に克ち、文は逸人を慎く。書契未だ紀せず、闡闡より臣たらず。冠冕蓋び襲ぎ、環瑋咸陳ぬ。

大上は名なく、上德は德ならず。玄功潛運し、幾の深き測る莫し。井を鑿ちて飲み、田を耕して食ふ、天功を謝する應し、安んぞ帝の力を知らむ。

上天の載するは、臭もなく聲もなし。万類資つて始め、品物形に流く。感に隨ひて質を變じ、德に應じて靈を効す。嶬乎として響の如く、赫々明々。

羅遐せる景福、蔽熒たる室祉。雲氏龍官、鳥國鳳紀。日は五色を含み、鳥は三趾を呈す。頌は工を稱めず、筆は史を停めず。

上善群を降し、上智斯れ悅ぶ。識を流して下を潤し、滂沛皎潔。洋洋醴甘く、水凝り鏡徹す。之を用ふること日々に新たに、之を挹めども竭くるなし。

道は時に隨つて泰に、慶は泉と流る。我が后夕べに惕たり、休すと雖も休せず。居は茅宇を崇くし、樂は較遊せず。黃屋貴きに非ず、天下を憂となす。

人はその華を玩び、我は其の實を取る。淳に還り本に反り、文に代ふるに質を以てす。高きに居て墜ちむことを思ひ、滿を持して溢るゝを戒しむ。茲を念へば茲に在り、永く貞吉を保つ。

象太子孝更令物海男臣歐陽詢奉勅書

300
138

昭和十五年八月三十日印刷
昭和十五年九月十日發行

放大古法帖（第三卷九成宮碑）

編輯兼發行人　中根貞臣　岡崎市能見町一九

印刷所　中央書道協會專屬印刷所

印刷人　岩堀惠以　岡崎市能見町一九

賣捌所　東京　大東文堂　東京　寶館　東京　海野堂　陸書館　北星堂　館　店

不許複製

發行所　岡崎市能見町一九
中央書道協會
電話（岡崎）一九〇番
振替口座（名古屋）一二二一二番
（東京）一九一四七番

（定價金五圓）

終